

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## ミルトンと内村鑑三：万人の救済と宇宙の完成

|       |                                                                                                                            |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2023-02-05<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 道家, 弘一郎, Doke, Hiroichiro<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.57529/00000016">https://doi.org/10.57529/00000016</a>                                          |

## ミルトンと内村鑑三

### — 万人の救済と宇宙の完成 —

道家弘一郎

わが生きんとする意志のみが万象を

生きつゝ遂に減ぶるなけむか

南原 繁

一九五五年一月、アルバート・シュヴァイツァーの著書を読んだの読後感である。シュヴァイツァーはオゴエ河を遡りながら、繁茂する熱帯樹林の間に群棲する河馬を見て、かつてデカルトがその哲学を決して疑うことのできない「吾思う故に吾在り」から出発させたように、シュヴァイツァーは、「生きんとする意志に囲まれた吾が生きんとする意志」こそ絶対に疑

うことのできない事実であり、この上にのみ彼の哲学を確立しうると確信したのであった。

シュヴァイツァー（一八七五—一九六五）の思想と活動に共鳴し、いち早くわが国に紹介したのは内村鑑三（一八六一—一九三〇）であった。最初に掲げた南原繁（一八八九—一九七四）の歌意はシュヴァイツァーから内村へ、そして遠く、ミルトン（一六〇八—一六七四）にも通ずるように思う。ただし「生命への畏敬」は万人に共通するものであるからである。

本稿では、内村とミルトンが、生命とその究極の形体<sup>すがた</sup>について

て、如何に考えていたかを述べたいと思う。

宇宙万物は神の祝福をうけて創造された。したがって、すべてのものは永遠に生きるはずであつた。しかし今や死を免れるものは一つもない。どうして、こういう事態に立ち至つたか。

死は罪の結果である。パウロは、死はアダムの罪に対する刑罰として世に入り、被造物はすべて死に服せしめられた（ロマ五12）、という。

だが、人間の死後の運命については、二つの考え方がある。死によつて無に帰するという考え方と、死後も永久の存在を続けるという考え方である。

エゼキエル書（一八4）には「すべての命はわたしのものである。罪を犯したものは死ぬ」とあつて、「悪人の絶滅」を示すように見える。が一方、マタイ伝（二五46）には、悪人は「永遠の罰を受け、正しい人たちは永遠の命にあずかる」とあつて、正しい者も正しくない者も永存という点では同じように見える。

死によつて「絶滅」とするのは悪人にとつては、むしろもつちの幸いで、地獄で永劫の業火に焼かれなくて済む（『失樂園』II 145—151）。しかし善人、とりわけ不幸と苦難ばかりの

人生を送つた善人には、報われることのない酷薄な考え方もある。さりとて「永遠の命にあずかる」というが、正しかった人すべてが今も地上にそのまま生きているわけではない。肉体の死が明白な以上、そこで考えられたのは「靈魂不滅論」である。プラトンにとつて、最高の実在は善のアイデアであつて、それは永遠不滅のものである。人間の理性もこのアイデアを幾分か分有しているのであるから、人間の靈魂は不滅である、ということになる。したがつて、死によつて肉体は死んでも、そのとき靈魂は肉体を離れて、どこかに生きていると考えられる。

「靈魂不滅に就て」と題する一文の冒頭で内村はこう語る。

靈魂不滅は基督教の根本的教義であると云ふ、故に基督教を説く者は必ず先ず神を説くと同時に靈魂不滅を説くを常とする、彼等は思ふ、先ず靈魂の不滅を解するにあらざれば基督教を解する能はずと。

然しながら奇異なる事には聖書には靈魂不滅なる熟語はないのである、靈魂なる語はある、又不滅なる語はないではない、然しながら靈魂不滅と云ふが如き、靈魂は其物自体にて不滅であると云ふことを通ずる語はない。（中略）然らば靈魂不滅の思想は何処から來たのである乎と云ふ

に、之は聖書より出たのではない、希臘哲学より来たのである、ピサゴラス、プラトーンなど云ふギリシヤの哲学者より出たのである、而して此思想が中古時代の神学者に由て基督教に輸入され、其れよりして靈魂不滅が基督教の根本的教義である乎のやうに思はるゝに至つたのである、……是れ基督教の特に伝へんと欲する所ではない、基督教は人を不滅たらしむるの道を伝へる(17・338—339)。

靈魂不滅はエジプト、インド、ギリシア、古代のどの人種も共通に懷いた思想であるが、ユダヤ人の思想ではない。したがって、ユダヤ人の思想を継承したキリスト教は、靈魂不滅をもつてその根本的教義としない。

では、どうして、そうなつたか。それはユダヤ人には、肉体と分離して、肉体と別個に靈魂だけを意味する語がなかったからである。それはただ一語「ネフェーシユ」をもつて、肉体と靈魂の結合した人間を意味した。したがって、肉体の死が明白な事実である以上、靈魂の死も当然であつた。

それに應えるごとく、ミルトンの『キリスト教教義論』はこう記している、そもそも人間は、「主なる神が土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられ

た。人はこうして生きる者となつた」(創世記二・7)のである。「人はそれ自体、まさに一個の独立した生きる者であつて、普通考えられているように、靈魂と肉体という、二つの異なつた別個の要素から造られ、構成された、二重の、分離しうるもの、ではない。それどころか、その人すべてが靈魂であり、靈魂が人である」(コロンビア版XV41、イェール版VI 318)。

たとえ靈魂と肉体とが分離できるものであるとしても、死をもたらず罪を犯した者はどちらか。罪を犯したのは靈魂の方であつて、肉体はなんら積極的な役割を果たしていない。靈魂こそ「主犯」である。

それゆゑ、「靈魂が死を免れ、肉体を脱ぎ捨てて、直接にか、あるいは天使に導かれて、報いや罰を受けるべく定められた場所へ飛んでゆき、そこに、世の終わりまで肉体とは別個に、孤立して、存在しつづける、という説は信じられない」(C XV 237, Y VI 407)という。

『失樂園』においても、「命の息(靈魂)だけが罪を犯したのである。とすれば死ぬのは、命をもち罪を犯したもののだけではないのか? 肉体は本来命も罪もどちらも持たない。としたら、死ぬときはわたしのすべてが死ぬことになるのだ」という。

It was but breath

Of life that sinn'd: what dies but what had life

And sin? The body properly hath neither.

All of me, then, shall die.

X. 789-792.

一方、内村に「人の三性」(17・375—382)という論文がある。テサロニケ前書五章23節に従って「人に三つの性がある」という。第一は肉 (Flesh)、第二は霊 (Spirit)、第三は自我 (Self) である。自我は靈魂 (Soul) とも称し、「人が自己を自覚する所である、彼の意志の所在であつて、善悪上下の定まる所である、自我の上に霊が有り、其下に肉がある、人の自我に於て霊界は物界と接し、二者の連結と調和とは之に依て司<sup>つかさど</sup>らる」(17・376)という。結びに曰く、「人は霊、我、肉の三性である、我を肉に置いて彼は無限地獄に陥るの危険がある、之を霊に置いて彼は三階の天に昇るの希望がある、悪魔は肉に拠りて彼を下に誘はんと努めつゝあり、神は霊に宿りて彼を上<sup>あ</sup>に召さんと為し給ふ、危機一髪とは実に人の生涯である、彼の小さな胸<sup>むね</sup>の中に人類の運命に關する最大戦争は常に闘はれつゝ、あるのである」(17・382)。

聖書では psyche (希) soul とあるところを内村は self とし

ている。内村が何を典拠にしたかは詳らかでないが、まさに soulこそ人間固有の領域であるから、self という表現は非常に的確であり、興味ぶかい。(因みに詩編第四二篇第一節「あ、神よ しかの溪水<sup>たにがは</sup>をしたひ喘ぐ<sup>あへ</sup>ごとく わが靈魂<sup>たましい</sup>もなんぢをしたひあへぐなり」は、すべての邦訳、また過去の英独仏訳いづれも「魂」と訳しているが、The New English Bibleのみ、単に「<sup>たましい</sup>」としている。)

ところで、ギリシア思想におけるごとく「靈魂の不滅」を信じていることができたなら、死は一面では肉体の牢獄からの解放であり、さほど悲しむべきことではない。ソクラテスの死はそれをよく示している。三谷隆正『幸福論』の冒頭は、私の知るかぎり、ソクラテスの死を最も格調高く表現した文章である。

西暦紀元前三九九年の晩春アテネでソクラテスが刑死した。人間の歴史あつて以来、ソクラテスの死ほど堂々たる死を死んだ人は他にない。法廷に立つての毅然たる弁明、死刑宣告直後の悠々たる直言宏辞。然り余りにも悠々たり、余りにも毅然たるかれの最後は、死して後までかれに対する敵の憎しみを刺戟したのであった。それほどまでに堂々

たる死をかれは死んだ(『三谷隆正全集』二223)。

それにひきかえ、イエスは、悲惨な死であった。彼は逮捕処刑を目前にひかえ、弟子たちを離れゲッセマネの園で、ただひとり悲しみにもだえ地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみを取り去りたまえ、「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください」と祈った(マルコ一四36)。「汗が血の滴るように地面に落ちた」(ルカ二二44)。

ソクラテスは靈魂の不滅を信じたが、イエスは信ずることができなかった。イエスにとって肉体の死は同時に靈魂の死滅であったから、死は、まさに「恐怖の王」(ヨブ一八14)であり、「最後の敵」(1コリント一五26)であった。望みはただ一つ「死者の復活」にかかっていた。

コリント前書十五章はキリストの復活について語って余すところなきパウロの復活論である。内村鑑三の「パウロの復活論」(24・557―583)もまたそれに見合う雄篇である。

キリストは死して葬られ、三日目に復活し、まずケファ(ペテロ)に現れ、次々と弟子たちに現れ、最後にパウロ自身に現

れた。パウロは今も生きている弟子たちをあげて、復活の事実を証言する。

ただ復活にも順序がある。初めはキリスト。彼は信者の初穂として復活した。次はキリスト再臨のとき、彼に属する者即ち信者である。信者復活の後、新時代は始まりキリストは大なる力をもって、すべての支配、すべての權威、すべての勢力、おおよそ彼に仇するすべての敵を足下に服従させ、最後に死を滅ぼして終に国を父なる神に渡したもう。こうして永遠の完全なる天国が実現する。

「凡ての人、アダムに由りて死ぬることく、凡ての人、キリストに由りて生くべし」(1コリント一五22)。

内村はこれに注している。

万。物。の。帰。す。所。は。如。何。、人。は。死。し。て。死。す。べ。き。で。は。な。い、故にキリスト先づ復活して我等の復活の初穂となった、之に由て彼再び来る時に我等も亦復活するのである、かくて新時代は始まり彼自ら凡ての權能を滅ぼし而して後国を父なる神に渡し自ら進んで神に従ふ、其最後の結果は如何、曰く「之れ神万物の上に主たらん為なり」と、思ふに聖書中若し短き一言の中に最大真理を含むものとすれば之

である、万物の帰する所、キリストの降誕と其十字架と其復活と其再臨との帰着は神が万物の上に主たらん事に在るといふ、其時に至て宇宙は完成するのであると云ふ、誠に凡ての哲学思想も之を以て尽くると言ふ事が出来る (24・570)。

「万物の上に主たり」とは旧い文語訳で、後に「萬の物に於て萬の事となり給」うとなり、現行の新共同訳では「神がすべてにおいてすべてとなられる」とある。

内村はさらに、「神がすべてにおいてすべてとなる」ということを敷衍して「神各自に在て凡てとならん為なり」(That God may be all in each) である、という (24・570)。

内村は'all in all'とあるところを'all in each'と言い換えて「我は永久に我である、個人は何時迄も個人性を失はない、…一人の例外もなく皆神の霊を以て充され其個人性を發揮しつゝ、到る所に於て神の栄光を顯はすべき筈である、…其時三位一体の神は我等各自に在て一切となり之を通じて其大なる力を現はし給ふのである、之れ実に哲学の絶頂である、又歴史の終局である、又信仰の理想である」という (24・570—571)。

内村は'all'を'each'と言い換えることによって、地上ではど

んなに欠点をもつ万事、万物、万民も、復活のあしたには、その一つ一つが、その個性を生かされて完成し、そこに神が充ち溢れる、といったのである。

一九〇八(明治四二)年九月一七日(木)、内村は青木義雄と日光の戦場ヶ原を歩く。そのとき語つた内容は、一か月後「戦場ヶ原に友人と語る——神の無窮の愛に就て——」と題して『聖書之研究』103号誌上に掲載された。

余が今日信ずる所は…即ち神は既にキリストを以て人類全体を救ひ給ふたと云ふことである、即ち世には救はれない人とは一人もないと云ふことである、是れは所謂「普遍的救済説」と云ふ説であつて、…余は夙くより密かに此説を懐いて居つた者である。

余が此説を懐く重なる理由は個人的である、余は思ふ、若し世に救はれない人が一人でもあるとすれば其人は余自身である、余は罪人の首である、故に余が救に漏れざらんがためには、すべての人が救はなければならない、万人救済は余一人の救済のために必要である、余は普遍的救済を信ずるに由てのみ、余自身の救済を確かめることが出

来る (16・114)。

このときからほぼ一年後、一九〇九 (明治四二) 年七月一日、『聖書之研究』111号に「余の信仰の真髓——人類の普遍的救済——」が掲載される。これも、「近頃電車中にて友人某に語りし所」とある。

余の信仰の真髓は神は愛なりと云ふことである、此前提よりして神はキリストにありて世を救ひ給へりと云ふこと、世全体を救ひ給へりと云ふこと、即ち人類全体を救ひ給へりと云ふことである、すべて人と云ふ人を悉くキリストに在りて救ひ給へりと云ふことである、余に取りては是より以下のことは福音ではない、余は又宇宙万物の造主なる父の神に是れより以下の愛を帰し奉ることは出来ない、余は神は愛なりと信じて少くとも彼に就て是れだけのことは信ぜざるを得ない、余に取りては人類全体を救ひ給はざりし神は神にして神ではない、神である、人ではない、父の父である (16・421)。

「神は、すべての人々が救われて真理を知るようになること

を望んでおられます」(1テモテ二4)。

「たとえ罪を犯しても、御父のもとに弁護者、正しい方、イエス・キリストがおられます。この方こそ、わたしたちの罪いや、わたしたちの罪ばかりでなく、全世界の罪を償ういけにえです」(1ヨハネ二1-2)。

内村は折に触れて万人救済を唱える。「神は世を愛し給へり」という。世とそのなかに在るすべての人、誰れ彼れの差別はない、善人を愛して悪人を憎むとか、義人を近づけて罪人を斥けるとか、いうのではない。まして白人、黄人、黒人の差別はない。「全人類を其愛の中に抱み給へりと云ふ、世に一人も神の愛に漏るゝ者はないのである、神は世を愛し給へりと聞いて亦我をも愛し給へりと言ふことが出来る、万人救済の真理は斯く明白に聖書に示されてあるのである」(一九一五 (大4) 10・10、『聖書之研究』183号、21・461)。

一九二六 (大15) 年末、内村は「再び万人救済説に就て」を書く(『聖書之研究』317号、30・170-177)。

イエスは「招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない」(マタイ二二14)とか、「この者どもは永遠の罰を受け、正しい人たちは永遠の命にあずかる」(マタイ二五46)と言った。また



その一方、「神は、その独り子をお与えになったほどに世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ三16)とも言った。前者は少数救拯説を、後者は万人救拯説を説くように思われる。両者ともに聖書に論拠をもつがゆえに、内村はここでは、「救い」とは何か、を問題とする。

内村の論議は委曲を尽くし、多岐にわたるので、結論を要約すれば、「救い」とは「神の子となること」、それは即ち「キリストと一体となること」、換言すれば、他人が滅びても自分が救われれば喜び感謝するというような自己中心的な「救い」から救われて、自分を忘れて他人を救おうと欲するような状態になることなのだ。それは万民を、一人のめれなく救うために、その一子を遣わして、犠牲の血を流さなければならなかった神と、共に働く者となることである。「神の愛の無限を疑ふ事は出来ない」ゆえに、「万人救拯」という「此高遠なる説を棄つる事は出来ない」という(30・17)。

内村の最晩年、死の半年前には、「若し第一のアダムの罪に因る万人滅亡が真理であるとすれば、第二のアダムの義に因る万人救済も真理であらねばならぬ」という記述がある(「罪と其根絶」一九二九(昭4)九・一〇、32・195)。

さて、内村と同じく「靈魂の不滅」ではなく「死者の復活」を唱えたミルトンの、死者たちの運命は如何。『失樂園』では、「死は眠りに似ている。死は永遠不朽の生命への静かな移行に他ならぬ」(a death, like sleep, / A gentle wafting to immortal life, XII. 434-435)。

しかし、やがて最後の審判が行なわれるとき、「啾唳たる喇叭の音が鳴り響けば、死せる者もその眠りを覚まされる。かくして、集まつたすべての聖徒を前にして、イエス・キリストは、悪しき人と悪しき天使を裁く。彼らは糺弾され、キリストの宣告を受けて落ちてゆく。そして地獄は、彼らでみち溢れ、その後永久に閉ざされる。」

such a peal shall rouse their sleep.

Then, all thy saints assembled, thou shalt judge

Bad men and angels; they arraign'd, shall sink

Beneath thy sentence: hell, her numbers full,

Thenceforth shall be for ever shut.

III. 329-333.

さらに続けて、ミルトンはその後の世界の消息をうたう、「その間、世界は燃え、その灰燼の中から、新しい天と新しい地が現われ、そこに義しい者たちが住み、長きにわたってあらゆる苦難を経たのち、勝ちとった歎びと愛と美しき真理を誇りながら、黄金の行為に満ち溢れる黄金の日々を迎えるだろう。そのとき、キリストは王者の笏を傍らに置くであろう、もはや王者の笏が必要ではないからである。神がすべてにおいてすべてとなり給うであろう」。

Meanwhile

The world shall burn, and from her ashes spring  
New heaven and earth, wherein the just shall dwell,  
And, after all their tribulations long,  
See golden days, fruitful of golden deeds,  
With joy and love triumphing, and fair truth.  
Then thou thy regal sceptre shalt lay by,  
For regal sceptre then no more shall need;  
God shall be all in all. III.333-341.

だが、そのあと、罪人で満杯の地獄はどうなったのか。第三

巻は、まだ天地創造以前に父が御子に語った預言であったが、第十二巻では最後に起るべきことが詳しく語られる、曰く、「最後には救い主が雲に乗って、父なる神の栄光につつまれて天より現われ、サタンとサタンに惑わされた邪悪な世界を滅ぼし、ついで、炎々と燃えさかる焔のなかから、義と平和と愛に根ざした、浄められ廓清された新しい天と新しい地、永遠無窮の時代をおこしたもう」。

Last, in the clouds, from heaven to be reveal'd,  
In glory of the Father, to dissolve  
Satan with his perverted world; then raise  
From the conflagrant mass, purged and refined,  
New heavens, new earth, ages of endless date,  
Founded in righteousness, and peace, and love;...

XII 545-550.

文中、*dissolve* という語に、私は注目したい。*dissolve* の第一義は、解体・分解・還元するところにある。つまり *Satan* は、その *satinity* を解かれるのである。そればかりか「やがて神に許されて、失っていた元の姿に戻ることができた。(Till their

lost shape, permitted, they resumed, X.574) といふ。サタンは、元の光り輝く第一級の天使に戻る事ができる。彼に従った者もまた然かり。なぜなら、神はみずから造ったものの一つも滅びることを欲しないからである。

『失樂園』のなかに「絶滅させる (annihilate)」という言葉は、(決してありえないこととして唯一回用いられるほかは) 一度も用いられない。「無からの創造」ではなく「神からの創造」を説く『キリスト教教義論』では、「万物は神に由来するのみならず、神の一部であるから、造られたものは決して絶滅するはずはない」という(コロンビア版 15・26—27、イエール版 VI 310)。

『失樂園』第二二巻、死の傷を癒す御子も、「サタンその者を滅ぼすことによつてではなく、アダムとアダムの子孫のうちに働くサタンの業を滅ぼすことによつて癒したものだ。」

Which he, who comes thy Saviour, shall recure,  
Not by destroying Satan, but his works  
In thee, and in thy seed... XII 393-395

文頭の Which は、前行末尾の 'thy death's wound' をうける。

かくして、神はアルファでありオメガである。「唯一の全能なる神が在<sup>いま</sup>したまい、すべてのものはその神から生じ、そして神に戻つてゆく、善より逸脱しない限りは。すべてのものは、もともと完全に善きものとして造られているからだ」。

one Almighty is, from whom  
All things proceed, and up to him return,  
If not depraved from good, created all  
Such to perfection... V.469-472.

たとえよし、一時の逸脱はあつても、キリストはサタンを解体し、あらゆる敵に打ち勝つ。最後には「死」も、死にいたる重傷<sup>ぶか</sup>を負い、死の刺<sup>さ</sup>を挽<sup>ひ</sup>ぎとられ、無残な姿でキリストに屈する(三252—253)。地獄は完全に消滅し、全宇宙に陰るものとは一つもなく、神がすべてにおいてすべてとなるであろう。そのとき父の御顔に怒りの黒雲はもはやなく、平和と和解の表情だけを見るであろう。今より後、怒り<sup>い</sup>はもはやなく、御前には全き欲<sup>ほ</sup>びだけがあるであろう(三262—264)。

しかし、人あつて、それは世の終わりの光景であつて、現在

のわれわれの姿ではない、というであろう。それならば、われわれは如何にあるべきか。今、現世にあつて、われわれにとり最も模範となり参考となるのは、イエス・キリストが父の命をうけて世界の創造に向かつたとき、父が御子にかけた<sup>はなむけ</sup>言葉である。全人類はキリストを長子とした「神の子」なのだから、キリストと同じく創造的な活動に参加しなければならない。

「我は在る」という神が無限の時空を満たしている (I Am, who fill/Infinite... VII. 168-169)。されば混沌のなかにも恐れなく乗り出し、そこに天と地をあらしめよ、世人が「運命」と恐れるものも、我が意志なのだから (what I will is Fate. VII. 173)。

アルバート・シュヴァイツァーは『キリスト教と世界宗教』のなかで、世界人生否定的悲観主義的であるか、世界人生肯定的樂觀主義的および倫理的であるか、を尺度として、世界の諸宗教を分類し、後者の最たるものこそキリスト教である、としている。

一九二五(大14)年八月六日、内村は日記に「自分は基督教の樂天主義者」である、「万物の終極は完成されたる宇宙であるとは凡ての健全なる哲学の結論である。そして此事を最も現

實的に教ふるのが聖書の教である」と記す。

翌八月七日、「今日は久振りにて面白い気持ちの好い本を読んだ。其れはアルベルト・シュワイツァー著『文明の墮落と其回復』である。近代文明に就ての余の言はんと欲する事を言ひ尽して呉れて有難かつた。…縦令<sup>たとえ</sup>一人なりともシュワイツァーの如き人が此世に在ると思ふと心強く感ずる。…久振りにて心の雲が晴れて嬉しかつた」。

八月九日、「悪は大勢力なりと雖も善は悪以上の勢力である。其理由は善なる神が万事を支え、小なる善と雖も之を受納し、之を拡大し、之を以て其聖旨を行ひ給ふが故であるに相違ない。我等は善を為してそれだけ宇宙の完成を進むるのである」(34・469-470)。

一九三〇(昭5)年三月二八日、死の床において内村が息柁<sup>せき</sup>之を通して残した最後のメッセージは、「如何なる時にも悪き事は吾々及び諸君の上に未來永久に決して来ない。宇宙万物人生悉く可なり。言はんと欲する事尽きず。人類の幸福と日本国の隆盛と宇宙の完成を祈る」というものであった(「父の臨終の記」, 35・57)。

一九三八（昭13）年三月二八日、内村の没後八周年、南原繁は万感の思いをこめて師を偲ぶ、その歌一首。

日本の万歳と宇宙人類の完成を  
にっぽん  
説き祈り逝きし君はも

（内村の死の翌年には満州事変、一九三七年には支那事変が始まり、その年の暮れには矢内原忠雄が東京帝大を追われ、明けて、一九三八年二月には、大内兵衛らも追放された）。